

巻頭言

協同の文化としての当事者研究

向谷地 生良 (北海道医療大学/浦河べてるの家/協同総研理事)

今から37年前、「地域の苦労を自分の苦労に」という奇想天外なキャッチフレーズをかかげながら、過疎化がすすむ北海道浦河町で起業を通じた“社会進出”をめざして、統合失調症や依存症などの精神障害を経験した若者有志と会社設立に向けたミーティングをした時のことです。起業のきっかけは、当時、私が勤めていた病院の営繕部門が行う敷地・施設管理(草刈りや廃棄物の処理)部門が、ときどきアルバイトを募集していることに目を付け、メンバーの雇用を病院側に働きかけたことに端を発しています。病院側の出してきた条件は、個人ではなく会社との契約でした。急遽、私たちは、メンバー有志に声をかけて会社の設立について話し合う場を持ちました。すでに、メンバー有志で日高昆布の産直をめざした作業所の運営(1984年・浦河べてるの家)をし、入院患者のために紙おむつの宅配にも挑戦していました。10人ほどではじめた話し合いは、最初から暗礁に乗り上げ、いつもは明るいメンバーもいっなくな口数が少なく暗いムードに包まれました。それもそのはず、働くことにさえ自信がなかったメンバーにとって会社を経営することは、想像もできないことでした。すると、そのやり取りを聞いて

いた一人の統合失調症を持つ女性が口火を切りました。「そうだよ、あんた達みたいな頭がおかしい人が会社つくってやっていけるんだったら、世の中苦勞しないよね」その一言に、早坂潔さん(現:べてるの家代表)が猛烈に反発をしました。「なんだその言い方は!」「あんただっておかしいじゃないか!」それをきっかけに話し合いは、大いに盛り上がりました。その議論をまとめたのが、薫さんというメンバーの言葉でした。私たちが、紙おむつの宅配に挑戦していたことを踏まえて彼女は「自分たちは、病気の経験があるから、介護とか地域の困っている人の役に立つ会社ができる気がする」と語ったのです。そして、最後に潔さんの「頭にきたから会社つくるべ!」という一言で会社の設立が決まりました。ですから、いまでも会社の設立に悲観的なムードの中で、火を投げ込んでくれた彼女は、会社設立の立役者として語り継がれています。

そのような経験を通じて、私たちが大切にしてきた場づくりのイメージが、「黒土のような場」であり、「里山のような場」です。仏教用語に「依正不二」(えしょうふに)という言葉がありますが、自然環境と私たち人間は、密接不可分の関係に

あり、人間も自然の一部であり、「死ぬこと一土に還る」を通じて、循環の営みの中にあることを意味します。『土中環境』高田宏臣著)これは「お前は顔に汗を流してパンを得る。土に返るときまで。お前がそこから取られた土に。塵(ちり)に過ぎないお前は塵(ちり)に帰る」(旧約聖書：創世記3章19節)という世界観と共通し、古代の人たちが描いた「ウロボロスの蛇」(古代ギリシア語で、自分の尾を飲み込む蛇の意味)に象徴されるような宇宙と自然、そして人間の循環のイメージとも重なります。

つまり、この世界観、人間観は、世の中の人々を良い人と、悪い人に選別したり、正しいことの積み重ねが社会を生きやすくするという発想とは異なるものだと私は理解しています。その一例が、先に紹介したべてるの会社設立に向けた話し合いの場面です。このことは『この人さえいなかったら』という人のおかげで新しい事業が生まれ「もっとも能率の悪い人」のおかげで職場に工夫と創造力が培われ、「病気」のお陰で、一番大切なものを見失うことなく、「山積みの苦勞」によって場に助け合いが生まれて、

職場の雰囲気がよくなり、それが人と場の成長をうながす』という苦勞の循環をうながす場づくりのイメージをもたらしました。そして、私たちは「今日も、明日も、明後日も、問題だらけ」という現実を生きながら、「それで順調」という“機嫌の良さ”を大切にしている手立てとして「当事者研究」(2001年)という活動を生み出したのです。この当事者研究は、「日常の困りごと、苦勞、思いがけず上手くいったこと、それらを話題(テーマ)として、お互いの間に置きながら語り合い、考える機会(対話)を重ねること。そして、そこから見出した知恵とかけがえのない経験を分かち合い、活かす活動」として続いています。

私は、協同労働をめざす「協同」とは、働く場と地域の中に「黒土」や「里山」のような循環を実現する試みであり、当事者研究とは、そのような場や地域の有機的な発酵を促進する酵母のようなものだと考えています。その意味でも、各地ではじまっている共通の世界観をもつ協同労働と当事者研究の「協同の試み」は、それ自体が貴重な社会実験だと言えるでしょう。